ヨコハマアートサイト
Yokohama Art Site

特集

メディアをつくる

星羊社 stocokroom NOGEにて、《はま太郎》を手にする星羊社のおふたり

vol. 031
2022

特集

メディアをつくる

a.

b.

レポート1

はま太郎

市民酒場からまちをみつめる

地元の飲み話から

《はま太郎》は、横浜で親しまれる大衆的な居酒屋「市民酒場」の取材を中心として、喫茶店や銭湯、地形や歴史など、さまざまな視点から横浜の文化を紹介する不定期刊行の地域情報誌。発行の株式会社星羊社は、星山健太郎さんと成田希さんの夫婦ふたりで経営する出版社だ。もとから野毛で飲むのが好きだったふたり。酒場を軸に本をつくろうと出版社を立ち上げた。

「酒場は地元の人のリラックスした素顔が出る場所です。酒場で耳を傾けると、横浜への愛情あふれる話が聞こえます。おしゃれな横浜のイメージとはまた別の魅力が見えてくる場所です」と星山さん。取材では心掛けていることがある。「いきなりではなく、何回か通ってから取材のお願いをしています。店や店主の印象も行くたびに変わりますし、一度では見えてこないことは多いです。お客としての立場をわきまえつつ、少しずつその場に馴染み、店の方にも顔を覚えていただいてから、お話をしてもらっています」。また、読者が《はま太郎》を通してお店の人と話すきっかけになることもある。「本と酒場というアナログなところからつながることは、面白いなと思っています」。

暗渠でつながる

《はま太郎》の紙面でしばしば登場する“暗渠(あんきょ)”の文字。暗渠とは、地下に埋設したり、ふたをかけたりした水路のことだ。酒場と暗渠のつながりについて、成田さんはこう語る。

「私たちが酒場を通してまちを見ていたところ、暗渠を通してまちを見る「暗渠マニアックス」(暗渠を独自に調査する髙山英男さんと吉村生(なま)さんのユニット)のふたりに出会いました。ふたりが横浜の

地域をあらゆる視点から取り上げ、

メディアとして届ける活動を行うみなさんにお話を伺いました。

どんな人がどんな思いで文章を書いているのでしょうか。

レポート1 はま太郎

レポート2 森ノオト

レポート3 横浜シーサイダー

d.

c.

a. 星羊社 stocokroom NOGE（倉庫兼販売所）の店内の棚。『はま太郎』が並んでいる。他にも地域の情報を扱う本やオリジナルグッズなどたくさん。

b. ミニコミ誌時代の《はま太郎》

c. 成田希さん（左）と星山健太郎さん（右）

d. ふたりが取材をするときにメモをとる項目を基準にして製作されたノート「御酒飲帖」。《はま太郎》でも登場する成田さんのイラストは想像力と空腹を刺激する。

暗渠を掘り下げてくれたら、私たちがその水路沿いの酒場を紹介し、まちをいろいろな方向から見ています。たとえば水路を通る漁師が売れ残った蟹を持ち込んだことで、カニ料理店になった店もあるんです。酒屋も搬入出の関係で川に近いですし、暗渠と酒場は案外親和性が高いんです」。この活動から、横浜の暗渠と酒場のマップが描かれた手ぬぐいもつくられた。

ふたり出版社から、これからをつむぐ

星羊社は大手からの独立ではなくゼロから立ち上げたため、当初はツテもなく、酒場で本を置いてもらうことから始めた。やがて酒場の縁がつながり、書店にも置かれるようになった。はじめはミニコミ誌としてモノクロ・中綴じだった《はま太郎》。今ではカラーで背表紙も付き、問屋を通した取引も開始。大手に劣らない本を、という目標には近づいた。しかし、いま立ち返る時期にきているとふたりは語る。

「本をつくるというのは、大きな労力のかかることです。自分たちで多くの取材を行い、寄稿も頂き、デザインして、印刷して、経済的にも大きいリスクを背負って、1年がかりで完成します。それでもお客さんは、雑貨よりも、本を買うにはすごく考え込むんです。本を買うハードルが高い時代だと感じます。そう考えると流通や情報量で、大手に対抗していても立ち行かない。私たちにとって原点回帰の時なのかもしれません。たとえば当初のミニコミ誌に近いかたちや、身近な人に話を聞いたり、もっとローカルなトピックを取り上げたりするなど、小さい会社だからこその、小回りの利く強みを出していくべきかもしれません。本を買うことに、意味を感じてもらえるものを届けるため、日々思索しています」。

酒場を語る時の生き生きとしたようすと、時代を見据えるたくましい目線。出し惜しみなく語ってくれるふたりの生きざまが垣間見られた。

株式会社星羊社　https://www.seiyosha.net/
星羊社 stocokroom NOGE（倉庫兼販売所）：
横浜市中区宮川町2-33-7 黒川ビル1階

レポート2

森ノオト

生活の目線から届けるローカルウェブメディア

自分の心を動かすことから

横浜市青葉区が拠点の《森ノオト》は、地域のお店やイベント、子育て情報や暮らしの知恵などを届けるウェブマガジン。約30名の市民ライターが記事を書く。編集長の梶田亜由美さんは「年代も、趣味も、ふつうなら出会わないようないろいろな属性の人たちが、記事や取材を軸につながり、語り合えるコミュニティでもあります」と語る。記事はそれぞれの視点から描かれながら、どこか統一されたぬくもりを感じる。「何を伝えたくて、なぜ取材したいのか、相手と対話をして何を思ったのかを盛り込むことにしています。心に届くかどうかは、上手さではなく、その人にしか出せない領域を出せるかどうかです。だから取材では、まず自分の心を動かすことが大事だと思います」。

日々の営みとして

《森ノオト》は代表の北原まどかさんがひとりで始めたウェブメディアだったが、活動の輪が広がり、メディア運営の他に、まちづくりやアップサイクルなど現在では4つの事業部を持つNPO法人となった。事業が多様化するなかでは混乱もあった。「忙しいと、現場では何を目指して頑張っているのか見えなくなることもありました。そこで2年ほど前、スタッフの間でじっくりと話し合い、ビジョンとミッションを言語化したんです。その時間を持てたことがとても大きく、自分たちが迷ったときに立ち返ることができるようになりました」。

編集長の梶田さんは富山県で新聞記者をしていたが、結婚を機に横浜へ来てから、《森ノオト》に関わった。仕事ではないコミュニティの運営に、はじめは難しさを感じたが、業務遂行に突き進むのではなく、それぞれの生活とともに営む場のあり方を知った。「ライターの方にはライフワークとして、書くことを楽しみながら取り組んでもらえる場づくりを意識しています。森ノオトでの活動を通して暮らしそのものが豊かになるといいと思っています」。

その人にしかできない発信が、生活の中で豊かに輝く場を《森ノオト》はつくっている。

a.

b.

c.

a. 編集長の梶田亜由美さん。緑豊かな事務所・森ノオウチのベンチにて。

b. アップサイクル事業Appliquéの「めぐる布市」のようす。
全国から寄付されたリサイクル品が美しく陳列される。

c. ローカルメディア事業で制作した「ローカルメディアコンパス」など。
ウェブだけでなく紙媒体にもかかわる。

森ノオト　https://morinooto.jp/
森ノオウチ(事務所):横浜市青葉区鴨志田町818-3

レポート 3

横浜シーサイダー

横浜で唯一の国際雑誌

インターナショナルなまちから

横浜で唯一、日英語で書かれた国際誌《横浜シーサイダー》。飲食店から文化活動、歴史、レシピまで、さまざまな分野から横浜を紹介するフリーペーパーだ。発行する株式会社Bright Wave Media から、横浜シーサイダーディレクターのアマト・ジョセフさんとライターで編集者の石川明子さんにお話を伺った。この会社では他にも日本文化を英語やバイリンガルで伝える雑誌が刊行されている。現在、代表の他にスタッフは6 名でアメリカ人と日本人が半々だ。

《横浜シーサイダー》は代表のライ・ベヴィルさんが横浜のような国際色豊かなまちにバイリンガルで書かれたフリーペーパーがないことに驚き、このまちで「人と人をつなげる雑誌」をつくりたいという思いから創刊された。そのコンセプトから、横浜という土地と深くかかわりのある場所や、横浜が好きな人に取材するようにしているという。「記事では、店や物だけでなく、取材する人の生き方を紹介し、その場所をより深く知ってもらうことを意識しています。それが、豊かな出会いにつながるのではないかと考えています」と語る石川さん。取材中、目を見て深く頷きながら話を聞く彼女の姿勢に、人と向き合う真摯さを感じる。

新しい横浜に出会う雑誌へ

アマトさんは国際誌の必要性について「今はウェブ翻訳などで、英語にアクセスすることは簡単ですが、手にとって読めるペーパーを求める人は案外多いものです。この雑誌を通して、ウェブではアクセスしづらいことや、ふだんの生活の中では気に留めないが、バイリンガルな視点だから気付けることなど、新しい横浜に出会ってほしいと思っています」と語る。別の活動では、琴をはじめとした日本文化を伝えるNPO 法人や、7artscafe も運営するアマトさん。彼の人をつなぐ力が信頼され、5 月号からディレクターを任された。「今後はより社会的な活動を意識し、横浜の歴史や文化に力を入れたいと考えています。横浜独自の味わいを誌面を通して残していきたいです」と今後の展開に意欲を見せた。

日本語と英語、内側と外側の視点を併せ持ち、横浜を見つめるふたりの姿がそこにあった。

a.

b.

a. ディレクターのアマト・ジョセフさん（右）とライターで編集者の石川明子さん（左）。アマトさんが経営する7artscafeにて。

b.《横浜シーサイダー》3月号～5月号。バラエティ豊かな表紙が並ぶ。

横浜シーサイダー　https://www.yokohamaseasider.com/ja/

今回の特集では、酒場、国際、生活とあらゆる視点から取材・執筆に取り組む姿があった。いずれの方の文章も読んでいると、そこにいる人の顔や人生が浮かび上がり、横浜というまちの息づかいが聞こえるような感覚を起こす。この感覚を誰より知るみなさんは、取材について語るとき、まるでその時にタイムスリップしたように表情がパッと明るくなるのだった。

ヨコハマアートサイト2021報告会について

テーマ	ヨコハマアートサイト2021報告会
参加者	「ヨコハマアートサイト2021」参加団体のみなさん
ゲスト	長尾聡子（アートアクセスあだち 音まち千住の縁事務局長） 原美紀（認定ＮＰＯ法人びーのびーの副理事長・事務局長）
聞き手・進行	小川智紀（ヨコハマアートサイト事務局）
日時	2022年3月6日(日)
場所	オンライン

「ヨコハマアートサイト２０２１」の報告会は、昨年に引き続きオンラインにて2回に分けて開催されました。ゲストには、認定ＮＰＯ法人びーのびーの副理事長・事務局長の原美紀さんとアートアクセスあだち・音まち千住の縁事務局長の長尾聡子さんにお越しいただきました。

２０２１年度のヨコハマアートサイトもコロナ禍での実施となりました。感染状況により開催が左右されるなかで、中止や延期も相次ぎましたが、オンラインへの切り替えや、これまでの経験を活かした工夫で、状況に合わせた柔軟な対応ができた団体が多くありました。また感染状況が比較的緩やかな時期では、久しぶりに対面での実施を再開できた事業もありました。参加者はコロナ禍での困難とともに、そのなかでのアイディアや成果を共有し、今後につなげていきたいと語りました。

長尾さんは「ヨコハマアートサイトの参加事業では、そこに関わった人たちが、また新たに別の仲間を連れてきたり、そのことで新しい提案や、別の事業が生まれたりしていることがとても貴重なことだと感じました。アートサイトから、地域文化の輪がいくつも広がっていることが分かりました」と本事業の展開への期待を語りました。

原さんは「ステイホームになって、このパンデミックな状況を表出・表現するチャンネルは必要だと感じています。交流したり、話をすることが得意でない人もいるなか、アートのように、話すだけではない表現を通して自分の思いを出せる場所が地域の中にあること、またその活動を続けることに価値があると思います。そんな場所を維持することに奔走しているみなさんのお話を聞けて勉強になりました」とコロナ禍によって浮かび上がる地域文化の重要性について語りました。

２０２２年度の参加団体も5月末に決定しました。次号より、季刊誌でもご紹介します。今後の活動にご期待ください！

ウクライナのボルシチとボスニアのパンによる食卓

小金井でウクライナのボルシチを食べる、ということ

寄稿：宮下 美穂

ヨコハマアートサイト2022の選考委員会のメンバーで、
NPO 法人アートフル・アクションの事務局長をされている宮下美穂さんが、
本と料理を通して、遠い国や災禍に思いを巡らせた翻訳の会でのお話をしてくださいました！

ロシアによるウクライナ侵攻が始まって１００日が過ぎました。何が起こっているのか？ どうして？ 私たちにできることはないのだろうか？ 世界で起きていることと私たちの日々の暮らしは、どこでどんなふうに接合するのか？ 小麦粉の高騰や北海道沖での漁業への影響を伝えるニュースも、巡り巡って私たちの暮らしと密接です。

１年半ほど前、小金井にある私たちのＮＰＯは、ボスニア・ヘルツェゴビナ紛争時に市民が日々を綴った冊子「THE ART OF SURVIVAL」の翻訳を有志で始めました。翻訳をしようと思ったのは、コロナ禍において戦禍での日常を知ろうと思ったからです。そして、同じく戦禍のサラエボが舞台の『サラエボ旅行案内～史上初の戦場都市ガイド』（１９９４、三修社）のあとがきに池澤夏樹さんが書かれた「ユーモアは緊急脱出装置だ」という一文を実践するためでした。

翻訳の会は月に二度、オンライン上で集合しました。ワンフレーズを訳すためだけにその回を費やすことも。そして訳しながら、ドラム缶のオーブンとはいかなるものか？ 戦禍では毎日、ご飯はどうしていたんだろう？ とそれぞれに想像しました。

翻訳の会は、キッチンでも集まりました。翻訳の会を運営する森山さんの、ウクライナのボルシチをつくってみよう！との提案からです。キッチンは、同じく翻訳の会に参加される坂本さんが開いているカフェのキッチンを借りました。すりおろした人参で炊くビーツには驚きました。山﨑佳代子さんの『パンと野いちご～戦下のセルビア、食物の記憶』（２０１８、勁草書房）に紹介された「戦争マーブルケーキ」。これはバターも卵も入れずにつくられたもの。ヨーグルトを入れたボスニアのパンも焼いてみました。

食卓を囲んで、参加した翻訳の会のメンバーからは、両親から伝え聞いたという第二次大戦の際の出来事も語られました。どうか一日も、一刻も早く、平和な日々が戻りますようにと祈ります。次はアフガニスタンの料理を、と思い巡らします。

宮下 美穂

みやした みほ　NPO法人アートフル・アクション事務局長

2011年から小金井アートフル・アクション！の事業運営に携わる。事業の多くは、スタッフとして市民、行政担当者、近隣大学の学生や教員などの多様なかたちの参加によって成り立ち、それぞれのノウハウや経験が自在に活かし合われ、運営されていることが強みである。編み物に喩えると、ある種の粗い編み目同士が重なり合うことで目が詰んだしなやかで強い布になるように、多様な表現活動が折り重なり、洗練されて行く可能性を日々感じている。

事務局うろうろ日記

ヨコハマアートサイト事務局は、今日も横浜市内の
あっちこっちへうろうろしています。

2月26日土曜日
尻手駅検定に挑戦。尻手駅から浜川崎駅周辺を歩きながら30問の問題の答えを考える。南部市場で牛かすうどんに舌鼓を打ったり、貨物線を数えたりと、地域の魅力を発見。特に、問題を解くために矢向地区センターで読んだ、地域のオーラルヒストリーが興味深かった。全問正解し1 級の認定証と手拭いをもらった。

3月19日土曜日
「スペースナナ」にてアートサイトラウンジvol.33に参加。ゲストは性暴力サバイバー自身が写真で表現を行うSTAND Stillのメンバーと、『くらしと教育をつなぐ「We」』編集長・中村泰子さん。社会における声にならない声のこと、その表現を誰かに伝えることについて伺う。写真展とともに深く感じ考える。

5月17日火曜日
桂台地域ケアプラザのギャラリーぷちぷちにて「春のお花の写真展」を見る。地域の人たちが撮影した写真から、ふだんは通り過ぎてしまうようなところにも、たくさんの花が咲いていることに気付かされる。隣接する障害者施設の利用者のみなさんの姿も写っていて、お散歩の楽しいようすが伝わってきた。

5月25日水曜日
弘明寺にあるアートギャラリー「Goozen」で行われる「Goozen meet me シリーズ#1 井上実×白田直紀展 ときのげ―時間外―」へ。このギャラリーは障害のあるなしにかかわらず、さまざまなアートと出会える場として、2022年4月にプレオープンした。日常のなかで、気張らずに楽しめるアート、これからの展示も楽しみだ。

ヨコハマアートサイトとは

横浜市地域文化サポート事業。地域課題の解決にアプローチする文化芸術活動、文化芸術の持つ創造性をコミュニティやまちの活性化と結びつける活動、ヨコハマの個性ある文化芸術を市内外へ発信する活動を広く公募し、支援する事業です。

事務局・お問い合わせ

ヨコハマアートサイト事務局（認定NPO 法人 ST スポット横浜、横浜市文化観光局）
〒220-0004 横浜市西区北幸1-11-15 横浜ST ビル 208（認定NPO 法人ST スポット横浜 地域連携事業部 内）
TEL:045-325-0410　FAX:045-325-0414　MAIL:office@y-artsite.org　https://y-artsite.org

@Y_Artsite　ヨコハマアートサイト　ヨコハマアートサイトに関することを中心に、横浜市内のさまざまな地域文化について発信します。

季刊ヨコハマアートサイト vol.031
発行：ヨコハマアートサイト事務局　編集：認定NPO法人 STスポット横浜　編集協力：大谷薫子　取材・テキスト：小川智紀、森崎花、田中真実
デザイン：小池佑子　撮影（表紙・特集1）：金子愛帆　印刷・製本：共進印刷株式会社　発行日：2022年6月30日
季刊誌についてのご意見・ご感想もお待ちしております。